

『奥会津―奥会津―』

奥会津書房発行



森に育まれた手仕事

農業・農村領域 研究員 飯田恭子



うと、もう次の年には出なくなってしまうがらな」と、ヒロロの草を細い縄になって、涼しげなバックを編む久保田節子さん。「俺たちは、山の恵みでものづくりをしている。だから、山に感謝して、山からいただいてきてるんだ」と語る長郷千代喜さんは、秋にクマがヤマブドウの実をたらふく食べられるように、実のなるつるを残しておく。

子どもの頃の山遊び、少年時代の釣り、山菜やキノコの採集、かつての炭焼き。奥山や里山の植生を知りつくし、それらに依存した野生動物の特性や行動を思い描くからこそ、必要な材料を必要だけいただく。山と里、そこに暮らす人たちの営みと思い、自然に生かされつつけるための技術と知恵が、奥会津の生活工芸品にはつまっている。

本書によると、素材となる植物は五月から十一月にかけて採集され、下ごしらえされて保管される。奥会津の人たちは、深い雪のなかで春を待ちこがれながら、その素材に新しい未来をさげける。めぐる季節とともにくり返される手仕事は、田畑や山林での営みの

歯車とかみ合って回りつづけ、受け継がれてきた。それは「いのちを伝える」営みである。

「本当のものが見えにくくなった今何を私たちは為すべきだろうか 調和の中にあった幼き魂は どこへ行こうとしているのか まだ、きつと間に合う 失った時の彼方に 子どもたちが歩く遠い未来に 変わらぬ確かなあかりがあると信じる たくさんの願いと、たくさんの力強い手で 切り立つ崖を歩こうとする子どもたちの その足元を照らそう」

これは、非営利の出版グループである奥会津書房の設立趣旨。有志の女性編集者たちが、細やかなまなざしをもちながら、力づくで大胆な出版活動と地域間の交流活動を展開している。本書は、書房が発刊するBOON文化シリーズの第二巻。書房の編集では、会津学研究会が発行する『会津学』もおすすめしたい。

『奥会津―森に育まれた手仕事』
一九九九年九月発行 A4変型
一二〇頁 オールカラー 一九五〇円

奥会津書房
住所 〒九六九-七五二-一
福島県大沼郡三島町宮下字中乙田九七九
電話番号 〇二四-一五二-三五八〇
FAX番号 〇二四-一五二-三五八一
メールアドレス oab@topaz.ocn.ne.jp

朝夕に霧にとけこむ只見川。その支流をさかのぼると、雪だけ水が深い谷を削る。せまりくる山は森におおわれ、もろい尾根には松がたらなる。谷ぞいの道を曲がると山がなだらかになって、うす紫の桐の花が、もえぎ色のワラビやゼンマイに包まれて咲く。田んぼや畑、雪国の大きなかやぶき屋根がならぶ里。川辺にたたずむ小屋からは煙があがり、まきストーブに鍋をかけた古老が、ヤマブドウのつるを湯にくぐらせてかごを編む。

奥会津では、マタタビやアケビ、ヤマブドウのつる、ヒロロ（ミヤマカンズゲ）やガマ、カラムシ（苧麻）、アカ

ソなどの草、モワダ（シナノキ）の内皮などから、生活に使う道具がつくりだされる。『森に育まれた手仕事』は、素材となる植物に寄り添う作り手の姿を、美しい写真とともに伝える。

「抜く時は、根元を足で押さえて抜がんなんねえんだよ。根がゆるんでしま